日本農薬学会の設立経過

設立実行委員長 見 里 朝 正*

1. はじめに

待望の日本農薬学会が昭和 50 年 10 月 14 日に設立された。今回、日本農薬学会が設立されてみて痛感したのは、学会が設立運営されるには、まず学会設立に対する強い要望が広く社会に存在すること、次に常時中心となって動く熱心な人たちが少なくとも 10 人前後必要であるということだった。学会設立などというものは、2～3 人の人たちが作ろうと思ってできるものではなく、意見、思想の異なる多くの人たちが協力して、初めてできるものだということが身に沁みてわかった。いままでは農薬の研究者が、各学会に散在していたのでわからなかったが、今回学会の設立ということで集まってみると、思っていたより農薬研究者の層が厚く、優秀な人材が豊富なのに驚いた。

学会設立に際しては実に多種多様な業務があるが、それを適材適所というか、その任に当たった人が手際よく処理していったのにはまことに感服した。学会設立に熱心に協力してくれたこれらの人たちに深く感謝するとともに、筆者は本学会の設立実行委員長として、学会設立の経過をご紹介します、記録にとどめたいと思う。

2. 農薬の研究組織

学会の設立基盤である農薬の研究組織が、わが国ではどうであったかを最初に紹介しよう。農薬の研究には、病虫害や雑草の生態や生理、生化学、薬品の合成化学、薬理学、毒性学、分析化学など各方面にわたる基礎的、応用的研究が必要である。わが国ではこれらの研究のうち、基礎的な研究や安全性に関する試験は、主として大学や国公立の農学、化学、医学関係の試験研究機関で行なわれており、新化合物の合成と生物試験による選抜および製造に関する研究は、主として民間企業によって行なわれている。農薬の実用規模での薬効・薬害試験や、農薬の使用方法などに関する応用試験は、国や都道府県

の農業関係の試験研究機関で行なわれている。

農薬そのものを研究目的とした研究機関は、官公立では昭和 20 年代には、京都大学と農林省農業技術研究所の 2 か所に存在するだけであった。昭和 30 年以降、農薬の農業における重要性が認識され、農薬工業が隆盛になるとともに、各大学に農薬の講座が新設され始めた。とくに、昭和 34 年、日本学術会議が農薬研究について政府に勧告を行なって以来、農薬講座の新設は活発になった。現在では北海道、東北、東京、名古屋、京都、九州の各大学(旧帝大)、東京教育、東京農工、三重、神戸の各大学にも農薬の講座ができたほか、農薬研究施設が京都に、生物防除施設が九州大学に、雑草防除施設が宇都宮大学に設置された。

また、同じく昭和 34 年の日本学術会議の勧告により、理化学研究所に農薬研究部門が設立された。農林省関係では農業技術研究所、農薬検査所に残留農薬研究室が増設され、厚生省関係でも食品の残留農薬および農薬の毒性部門が増強された。また、作物への残留農薬の分析および農薬の毒性試験を行なうため、財団法人の残留農薬研究所が昭和 46 年に設立された。なお、各県の農業試験場にも作物への残留農薬分析部門が設置された。

企業の農薬研究機関としては、昭和 20 年代では東亜農薬とイハラ農薬(のちに合併してクミアイ化学)、日本農薬、北興化学、日本特殊農薬などの農薬専門メーカーのほかは、三共、日産化学などに農薬研究施設があったに過ぎなかったが、昭和 30 年以降は武田薬品、住友化学、日本曹達、三菱化成、三井東圧化学、日本化薬、呉羽化学、明治製菓、石原産業などの製薬会社や化学工業会社が、つぎつぎと大規模な農薬研究施設を作った。さらに最近、科研化学、宇部興産、昭和電工、協和醗酵、味の素なども小規模ながら農薬試験施設を作った。このようにして農薬の研究施設は増大し、農薬研究に従事する研究者の数も増大した。

3. 農薬の研究発表の場

昭和 20 年代の初期、BHC が農薬として登場してきた

* Tomomasa MISATO, 理化学研究所(埼玉県和光市広沢)

ころは、BHC の合成・分析に主導的研究を行っていた京都大学の武居三吉・中島稔教室主催による研究会や講習会が、京都で毎年開催され、主として農薬企業の研究者たちが集まった。研究会終了後の祇園での懇親会はとくに楽しいものであった。その研究成果は、当時唯一の農薬の専門誌であった“防虫科学”に発表された。その後、パラチオン導入をきっかけとして始まった海外からの新農薬の導入競争により、研究活動も多種類の農薬に分散したため、京都における研究会はなくなった。

代わって、情報の中心である東京において、農薬工業会の尾上哲之助氏、農業技術研究所の福永一夫氏らが中心になって、農林省や農薬企業の研究者、技術者を主とした農薬研究会が昭和 34 年から開催された。この農薬研究会では昭和 35 年 3 月から雑誌“農業生産技術”を刊行し、広く農薬に関する報文、総説、解説、資料などを掲載したので、農薬の研究者たちに喜ばれた。“農業生産技術”はその後“農業科学”と誌名を変更し、今日に至ったが、日本農薬学会が設立され、学会誌が刊行されることになったので、その刊行目的を学会誌に引きついでもらうことにして、昭和 50 年度で終刊の運びとなった。

昭和 20 年代から 30 年代、40 年代となるにつれて、農薬に関する研究活動は活発になり、日本農芸化学会、日本植物病理学会、日本応用動物昆虫学会、日本雑草学会などの各学会で、たくさんの研究発表が行なわれるようになった。しかしながら、農薬を同一の場所で論ずることができないという不満があったが、名古屋大学の宗像桂教授が昭和 43 年、名古屋で“農業科学シンポジウム”を開催し、このような場所を提供した。このシンポジウムは好評で、以後各大学の持回りとなったが、第 3 回の京都大学主催のときから、上記関連学会と日本学術会議との共催で行なわれることになった。本年、東京農工大学の佐藤六郎教授主催で 10 月 16 日に東京で行なわれた“農業科学シンポジウム”からは、本学会も共催の一員となった。

このほか、わが国の農薬研究の発展のために忘れてならない会議として、日米農薬セミナーがある。この会議では人数を 50 人以下に制限し、原則として会員が同じホテルに宿泊し、数日間にわたって日米両国の農薬問題について熱心な討議がかわされた。農薬の安全性問題について研究が進んでいる米国科学者との討論は、わが国の科学者にとっても非常に有益であった。昭和 42 年から 48 年の間に合計 6 回行なわれ、わが国では学術振興会の援助を受けた。同セミナーの日本側世話役と開催地を開催順に書くと、鮎沢啓夫(福岡)、福永一夫(日光)、

中島稔(ハワイ)、山本出(東京)、宗像桂(ノースカロライナ州のラレー市)、見里朝正(大磯)であった。

4. 学会設立への動き

わが国における農薬研究の動きとは別に、国際的な農薬研究の発表の場として、IUPAC (International Union of Pure and Applied Chemistry) の主催で、4 年に 1 回国際農薬会議 (International Congress of Pesticide Chemistry) が開かれていた。この 3 回目の会議が昭和 49 年 7 月にヘルシンキで開催されたが、これに先立って、4 回目または 5 回目の会議を日本で開いてほしいという要望があったため、ヘルシンキの会議の前に、日本開催を受入れるかどうかについて、日本側の態度を決める必要があった。

IUPAC の日本の委員である宮本純之(住友化学)と田中俊彦、浅川勝(農技研)の諸氏らが中心となり、大学、官公立、民間の各研究機関から代表的な農薬研究者数十人が集まって国際農薬会議受け入れの是非について討議した。この会合は数回持たれたが、各方面の人たちが集まって、農薬のあり方、研究方向が真剣に討議されたのは始めてであり、この会合が本学会設立のきっかけとなった。結果的には、第 4 回は日本側は見送ることになり、スイスで 1978 年に行なわれることになったが、1982 年の第 5 回は日本で開かれる公算が大となった。

ヘルシンキの国際農薬会議には中島稔(京大)、前川一之(九大)、宗像桂(名大)、松原弘道(名城大)、山本出(農大)、松中昭一(農技研)、宮本純之(IUPAC)、沖本陽一郎(玉川大)の諸氏を始め、筆者を含めてわが国から約 30 人の研究者が参加し盛大であった。その大部分は同一ホテルに宿泊し、会議終了後も同行動をとったので、その間にいろいろと農薬研究のあり方に関する話題に花が咲き IUPAC の国際農薬会議の受け入れの母体としても、帰国後はぜひわが国に農薬学会を設立しようではないかと話し合った。

帰国後の 8 月 20 日、東京農林年金会館ホールで開かれた農薬工業会技術懇談会で、中山治彦(植物調節剤研究協会)、宗像桂、宮本純之の諸氏によりヘルシンキにおける国際農薬会議の報告が行なわれた。その際の懇談の席上で、農薬学会の設立が話題となり、ぜひ前向きの姿勢で積極的に、学会設立を推進しようということになった。そして、8 月 30 日に新宿の養浩館で、ヘルシンキ会議参加者のほぼ全員が集まって開かれたポスト・コンGRESの会合で、具体的な推進方法が討議され、まず、農薬に関連のある学者、研究者を全国から集めて、学会設立の発起人会を開こうということになった。そのため

には、ちょうど10月29日に学術会議の植物保護・農業研究連絡委員会の主催による“農業の安全性に関するシンポジウム”があり、全国から農業に関連のある学者、研究者が集まるはずなので、その前日の28日に学術会議で開けば、集まる人たちも都合がよいであろうということで、同委員会の日高醇委員長のご了解を得ることになった。

さっそく、九州大学の日高醇教授にお電話したところ、ご快諾が得られたので、さっそく、農業に関連があると思われるおまな学者、研究者80人に日高醇委員長名で、発起人会へのご参集を呼びかけた。その間、10月6日に東北大学の山下恭平教授が中心となって仙台で開かれた農業科学シンポジウムの昼食会の席上で、筆者から農業学会設立の動きについて説明を行なったところ、山本亮、武居三吉、大島康義先生など農業研究の大先輩方のご賛同、ご激励が得られた。ここまでは万事トントン拍子に進んできたので、発起人会が済んだら、ただちに具体的な準備にはいり、翌年の4月には設立大会が開けるだろうと喜んでいた。

5. 第1回発起人会からアンケート調査まで

ところが、10月28日に東京青山の学術会議で、36人の出席者を得て開かれた発起人会では、議論が百出した。とくに多かったのは、農業は既存の多くの学会でもすでにとりあげられているので、これらの他学会との調整をどうするのかという意見や、他学会との関連において農業学会の性格をどのように位置づけるのかという質問が多かった。また、発起人会開催に至るまでの手続きの不便さを指摘される方もあり、ヘルシンキに行った人たちだけで最初に計画が進められたということから、ヘルシンキ組という言葉が生まれるほどであった。主として経過説明に当たった筆者は、思わぬ事態にシドロモドロであったが、これを何とかとりまとめ、実行委員会の設置にまで漕ぎつけることができたのは、議長として発起人会の議事進行にあたった宮本純之氏の手腕によるものであった。この名議長としての手際良さには、まったく感服させられたが、以後設立総会に至るまでの1カ年間にわたる実行委員会の議長は、毎回宮本純之氏にお願いすることになった。

発起人会では上述のように、いろいろなご批判やご意見が出されたが、最終的には出席者の大多数の方々から、学会設立について原則的な賛成が得られたので、その具体的な推進のために設立実行委員会が発足し、委員長に筆者、副委員長に山本出氏が選出された。発起人会で、農業学会の性格を明瞭にし、他学会との調整を慎重

に行なえとの意見が多かったことから、まず、応用動物昆虫学会や植物病理学会の運営のベテランである農業技術研究所の河野達郎、水上武幸の両氏にご相談に伺った。田中俊彦農薬科長の部屋で、山本出氏と筆者を加え、合計5人で今後の方針についていろいろ討議したところ、河野達郎氏がアンケート調査を提案された。河野氏のご意見では、いまの世の中では多数意見だということが最も大切であり、それを知るにはアンケート調査を行なえばよい、時間がかかるようでも、それが一番の早道だということであった。確かにそのとおりだと思われたので、翌年の4月に設立大会を開くなどということは白紙にもどし、一応原点にもどって、農業学会設立の可否、可であればその性格はいかにすべきかということ、広く意見を聞くためアンケート調査を行なうことにした。アンケートを行なうに際しての設立趣意書の文案は松中昭一氏が作成し、アンケートの調査項目、文案は山本出氏が作成し、アンケートの発送と回答のとりまとめは、筆者が担当した。アンケートは12月14日に発送し、1月30日に締切って調査結果を集計した。アンケートおよび調査結果は次のとおりである。

<農業学会についてのアンケート>

- I 農業学会設立について。○印をおつけ下さい。
可 否
 - II 農業学会への入会について。○印をおつけ下さい。
入会したい 入会しない 未定
 - III 農業学会の性格について貴殿のお考えをお示し下さい。
下表の()の中に3, 2, 1, 0の数字をお入れ下さい。
3—重点をおくべき分野である。
2—他学会、研究会と重なるがともに努力すべき分野である。
1—取り扱う範囲にはいるが他学会、研究会のおもな領域である。
0—取り扱わなくてよい。
a 合成	()
b 化学構造—活性相関	()
c 作用機構	()
d 製剤・施用法	()
e 分析法	()
f 残留	()
g 代謝	()
h 分解・変換	()
i 化学生態学	()

j	環境化学	()
k	生態系への影響	()
l	有用動物への影響	()
m	毒 性	()
n	害虫への作用	()
o	病害への作用	()
p	雑草への作用	()
q	その他有害生物への作用	()
r	作用への作用	()
	以上の他の分野	()
s	_____	()
t	_____	()
u	_____	()
v	_____	()
w	安全性評価	()
x	総合評価	()

IV 貴殿のご関係分野を上表の () の後に五つ以内○印でお示し下さい。

V その他ご意見などございましたらご記入下さい。書ききれない場合は裏面をお使い下さい。

VI ご加入の学会、研究会名

＜農業学会アンケート調査結果＞

I. アンケート集計結果

アンケートの発送数 2,500 通に対して、回答のあったものは 1,561 通で、62.4% の高い回収率が得られたことは、農業学会に対する関心が高い結果と思われる。さらに、農業学会の設立を可とするものが回答者の 97.4% に当たる 1,520 名もの多数に達したことにより、本学会設立の基盤が確立したと考えられる。

回答者を所属別に分けると、企業研究者が約 50% で半数を占め、ついで農業試験場など官公庁の研究者が 30% で、残りが、大学、法人関係の研究者であった。また、回答者の関連分野はアンケート調査項目の全分野に及び、本学会入会希望者の関係分野が広いことが示された。

アンケート発送数 2,500

回 収 1,561 (回収率 62.4%)

農業学会設立について 可 1,520 否 20 無記入 21

農業学会入会について 入会したい 955 未定 504

入会しない 81 無記入 21

農業学会の性格について、入会したい 955 名と、未定 504 名についてまとめた結果「重点をおくべき分野である」としたものと、「他学会、研究会と重なるが、ともに努力すべき分野である」としたものの合計が、合成を

所属別の人数および割合

		入会したい		未 定	
		名	%	名	%
官 公 庁		286	30.0	174	34.5
大 学		104	10.9	54	10.7
会 社		479	50.1	241	47.8
そ の 他		86	9.0	35	7.0

除く全分野（化学構造-活性相関、作用機構、製剤・施用法、分析法、残留、代謝、分解・変換、化学生態学、環境化学、生態系への影響、有用動物への影響、毒性、害虫への作用、病害への作用、雑草への作用、その他有害生物への作用、作物への作用、安全性評価、総合評価）で 80% 以上となり、学会活動の希望分野が広いことが示された。学会の性格については、上記調査結果を裏付けるような多数の意見がよせられたので、代表的な意見をいくつか紹介する。

- ・学会で取り扱う範疇を固定的に考えないほうが望ましい。情勢に応じて、未開拓の分野を受け入れていけるようにしてほしい。
- ・農業は諸分野の科学が総合されて発達するものなので、一部の分野に重点をおくべきものではないと思う。学会の活動も諸分野の科学者の交流の場として運営されることを希望する。
- ・農業学会の農は純農に限定されているようだが、衛生害虫の駆除や林産物・水産物の保護にまで拡張すべきである。
- ・生物農薬や物理的防除方法なども取り入れてほしい。

学会誌に関しても多くの意見が寄せられたが、大別すると、農業関係の最高の権威ある雑誌にしてほしいという意見と、解説・総説などを含め農業関係論文を広く取り入れてほしいという意見の二つに分かれている。

次に代表的な意見をいくつか紹介する。

- ・学会誌に発表される報文の質に留意し、学会を権威あるものにしたい。
- ・わが国の農業の諸研究・業界の動向も国際的に関心をもたれている情勢から、学会誌はぜひ英文とし、海外へも積極的に配布してほしい。
- ・農業学会の機関誌を読めば、農業の全貌が得られるようにありたい（外国も含めて）。
- ・研究報告だけでなく、解説、総説などを含む機関誌も発行してほしい。

6. 小委員会設置から第2回発起人会まで

アンケート調査の結果、農薬学会設立を可とする基盤がはっきりしたので、設立総会ならびに設立記念大会を昭和50年10月14日、15日の2日間にわたって、東京商工会議所東商ホールで行なうことを決め、これを目標として作業を進めることにした。これら学会活動の準備のため、実行委員会に下記のような小委員会を設け、人員も拡充強化した。

- ①設立総会関係……**鍛塚昭三***、**斉藤哲夫**、**中島 稔**、**中村廣明**、**福永一夫**、**松井正直**、**宮本純之***、**宗像 桂**、**山本 出***
- ②学会誌関係……**植木邦和**、**上杉康彦**、**後藤真康**、**進藤 登**、**田中俊彦***、**能勢和夫**、**深見順一**、**深海 浩***、**見里朝正**、**宮本純之***、**山下恭平**、**興良 清**
- ③設立大会関係……**浅川 勝**、**内山 充**、**鍛塚昭三***、**佐藤六郎**、**橋本 康**、**松中昭一**、**松本義明**、**見里朝正***、**山口富夫**（総会を除く）
- ④庶務会計関係……**熊野義夫**、**黄 耿堂**、**諏訪内正名**、**細辻豊二***、**見里朝正***、**村田道雄**、**山口 勇**

(* 印は取りまとめ責任者、五十音順)

それまでも実行委員会は月に1度ずつ開かれていたが、3月に小委員会が設置されてからは月に数回の会合が開かれ、各小委員会は国内および国外のいろいろな学会を参考にして原案を作成し、この原案を実行委員会で慎重に討議して決定した。これらの会合は全員の都合が良いということで、ほとんど土曜日の午後に行なわれたので、7月に開かれた第2回の発起人会までの間は、大部分の実行委員の人たちは土曜日なしであった。このような熱心な委員の活躍ぶりを紹介するのも、委員長の仕事であると思うので、次にその概略を述べよう。

学会が設立されてから振りかえてみると、第1回の発起人会から総会までの間は、大きく分けて三つの時期に区切られる。すなわち、発起人会からアンケート調査までが前期、アンケート調査終了後小委員会ができて第2回の発起人会（7月5日）までが中期、その後設立総会・大会までが後期である。野球でも選手が交替したり、活躍する選手が回によって異なることがあるように、学会の設立経過でも誰かが都合が悪くなると、それに代わって活躍する人が必ず出てきて、農薬研究者の層の厚さを感じさせた。

前期の活動状況は前節で述べたので省略するが、付け

加えねばならないのは、アンケート調査の名簿作り、発送、結果のまとめを手際よく処理してくれた笠井庸子さんの活躍である。笠井さんは茶業試験場の病理学者笠井久三氏のお嬢さんで、筆者の研究室の研究生をしているが、学会事務局が設立されるまで、実行委員会の事務を一手に引き受けてくれた。委員会で議論が沸騰したとき、美しい紅一点の存在は、人々の心を和やかにした。

小委員会が設置されてからの中期には、各委員がそれぞれの特長を發揮して大活躍をした。一番重要であると同時に大変手数がかかる学会の会則、細則、事業計画、予算などの原案は、緻密な理論派の鍛塚昭三（名大）、山本 出、宮本純之の諸氏が作成した。投稿規定、投稿細則などの学会誌関係は、長年にわたり“農薬生産技術”および“農薬科学”の編集長だった田中俊彦氏が中心となり、深海 浩（京大）、深見順一（理研）、上杉康彦（農技研）、能勢和夫（農技研）などの諸氏により原案が作成された。これらの原案が討議された際に、農林省で法規の作成などに熟練している後藤真康（残留農薬研）、中村廣明（農薬検）の両氏や福永一夫氏（理研）の助言により、文章が適切に訂正されることがしばしばあった。

他学会との調整に関しては、中島 稔、宗像 桂氏が農芸化学会、松本義明（東大）、斉藤哲夫（名大）氏が応用動物昆虫学会、山口富夫氏（農技研）が植物病理学会、植木邦和氏（京大）が雑草学会、内山 充氏（衛試）が薬学会、食品衛生学会との連絡調整にあたってくれたので、他学会からのアレルギー反応もなくなってきた。また、本年度の農薬科学シンポジウムの責任者であった佐藤六郎（農工大）、諏訪内正名氏（農工大）は、同シンポジウムと農薬学会との調整に奔走された。村田道雄（千葉大）、進藤登（明大）の両氏は農薬工業会、農薬企業の研究者たちの、農薬学会に対する希望、要望などの窓口となってくれた。このころ、設立前期に活躍した松中昭一氏は、本年秋に東京で開かれる第5回アジア太平洋雑草学会開催の責任者となりそちらが忙しくなったため、まったく姿を見せなくなった。また山本出氏も原案作成を完成すると同時に、6月から3カ月の予定でテキサス A & M 大学に客員教授として留学された。なお、発起人名簿に名前を連ねている外国の学者は、山本 出氏の勧誘によるものであった。

会則案、事業計画案、予算案、投稿規定などの原案が完成したので、いよいよ7月5日に神田の学士会館で第2回の発起人会を開くことにした。今回は運営がスムーズにいくようにスケジュールそのほかに細かい配慮が前もってなされたが、それらの手配は細辻豊二氏（理研）が行なった。発起人会に提出すべき会長、副会長など役

員の選出についてはいろいろな意見があったが、最初からの選挙は無理なので、実行委員会の話し合いで役員候補を選出し、発起人会、総会で認めてもらうことにした。そして会長としては、長年農林省農業技術研究所の農業科長を務めた経験から、研究面と実際面の両方を知っている福永一夫氏を推薦し、副会長には名古屋大学の農薬化学講座の教授である宗像桂氏と農業技術研究所の病理昆虫部長の水上武幸氏を推薦することにした。

第2回の発起人会は、事前に行なった細辻豊二氏の細かい配慮と、宮本純之、佐藤六郎、浅川 勝の3議長の手際よい運営で、大部分の議案はスムーズに承認された。意見のあった個所についてはさらに検討し、設立総会の直前にもう一度発起人会を開いて了承を得ることにした。発起人会のあとで開かれた簡単なビヤ・パーティでのビールが旨かった。

7. 学会事務所設置から設立総会・大会まで

農薬学会の事務局は、植物病理学会や応用動物昆虫学会の事務局と同一の場所にあったほうが便利だということで、日本植物防疫協会内におくことが、発起人会で了承された。協会の好意により川又優子さんという協会職員が、7月1日から農薬学会の事務を扱ってくれることになった。これに伴い業務分担の変更があり、学会誌の編集事務局は理研におき、筆者と黄耿堂、深見順一氏など理研関係が中心となって創刊号の編集にあたり、その他の学会事務は一切事務局で行なうことになった。このため、会員募集、設立大会関係の膨大な事務は事務局の仕事となったが、浅川 勝、細辻豊二、熊野義夫（城西大）氏の3人の事務局委員の献身的な努力によりこれが達成できた。

第3回の発起人会、設立総会、設立大会、評議員会などのスケジュールは、日本農薬 K.K. 専務として株主総会を何度も経験したことのある熊野義夫氏の助言を受けて、浅川勝氏が実に詳細な分刻みのスケジュール表を作成してくれたので大助りであった。また、設立大会の講

演要旨集の編集は柿本和雄氏（理研）が、設立総会・大会の会場整理は、本間保男、山口 勇、米山勝美氏など筆者の研究室全員で行なった。さらに、何をやるにも一番大切なのは資金であるが、そのための維持会員の募集は福永一夫氏が担当し、所期の目標以上に集めるのに成功した。

設立総会・大会の開かれた10月14日、15日の両日は素晴らしい晴天で、会場前の皇居の松の緑が、澄みきった青空に映えて一段と美しかった。14日、午前9時から開かれた第3回の発起人に引き続いて、午前10時からの設立総会で正式に日本農薬学会が全員の賛同のもとに成立した。日本学術会議を始め関連諸学会やアメリカ化学会など多くの学会が、祝辞を述べて祝ってくれたことは、関連諸学会との調整がうまくいった何よりの証拠であり嬉しかった。14日の午後と15日には、本誌に掲載されているような記念講演会が開催され、定員600人の大会場がほぼ満席になるほどの盛況であった。

学会設立を祝って14日夜に、東京商工会議所の8階にあり、皇居前広場の美しい夜景が眺められるスカイルームで祝賀会が開かれた。武居三吉京大名誉教授と堀正侃日本植物防疫協会・残留農薬研究所理事長の挨拶のあと、農薬研究の最長老の山本亮先生の音頭で乾杯し、全国から集った農薬研究者たちによる楽しい会合が持たれた。

記念講演会では筆者は会場の全景が見渡せる一番後の席で、講演を聞き、満員の聴衆を眺めながら、ヘルシンキ以来この1年間の学会設立に関するいろいろなでき事を、あれこれと思い浮べ感無量になっていたため、大会終了時に大会運営委員長としての挨拶をするのを忘れてしまったことは、まことに申しわけないことであった。大会が終了した時点での会員申込数は、正会員916人、学生会員16人、維持会員54社、団体会員14件、購読会員4件で、合計1,004会員であった。日本農薬学会設立に際しご協力、ご援助して下さった多くの方々に対し、心から深く感謝する次第である。